熊本大学教育学部紀要，人文科学
第59号，1－8，2010

CBR 保護者支援プログラム（第三期）の効果の検証

宮本佳代子* ・福田沙耶花** ・肥 後 祥 治

Confirmation of the Effectiveness of the Support Program for Parents（Version3）Based on the Idea of CBR

Kayoko MIYAMOTO・Sayaka FUKUDA・Shoji HIGO

（Received October 1, 2010）

The purpose of this study is to confirm the effectiveness of the support program for parents who have prescool children with high risk. The program based on the idea of community based rehabilitation was developed by Higo's research group. To attain the purpose of this study, the focus group interview with the parents who attended the program was adopted.

Analysis of the interview with the parents showed that there were following four significant traits in the program; （1）child support program, （2）the opportunity to talk with parents whose situations alike, （3）the opportunity to look themselves back, （4）circumstance where they can talk freely without their children.

This study has proved that attendants can exchange information and reduce uneasiness they have by sharing the same anxiety with others. In addition to that, a positive atmosphere that they should try to settle the problem by themselves even without specialists pervaded them. To develop the program into the community, it is important for parents to realize its effectiveness. Actually, parents who attended the program were empowered and their empowerment had been maintained for three months when the follow-up program was performed. This is because they had kept in touch regularly after the program. We will keep on performing and certifying the program so that mothers and other non-specialists can take part where we did in this study.

Key words : CBR, Child support program, Rehabilitation system for preschool age

1. 問題と目的

わが国の母子保健法に基づく乳幼児健康診査は，子どもの障害の有無・発達に関する様々な問題の早期発見に繋がっている．しかし，地域での療育システムにおいては，専門機関や専門家の不足といった困難な課題を抱えている．このことは，施設中心型リハビリテーション（IBR：以下 IBR とする）に基づく療育サービス提供システム下においては，施設的ハードが確立していないと療育を受けることが難しい事を意味している（上野 2007）．

肥後（2003）は，地域社会に根差したリハビリテーション（CBR：以下 CBR とする）の視点から，これまでの施設中心型のリハビリテーションの変更の必要性を提言し，地域の社会資源の戦略的運用と既存資源の再評価・再活用の重要性に関心を向けた，その取り組みが就学前期の療育システムの構築に重要であると主張している．

肥後の研究グループは，CBR の考えに基づく「地域での早期療育システム」の構築を目指し，2008 年に①保護者支援プログラム，②子ども支援プログラム，③ボランティア養成プログラムを試行・検証した（第一期）（楢木野，2008；筒井，2008）．そして，2009 年に①～③のプログラムを改訂し，試行・検証した（第二期）（宮本 2009；百田 2009；半田，2009）．さらに 2010 年にプログラムを改訂し，試行・検証した（第三期）（福田 2010；百田 2010）．

本研究は，第三期の保護者支援プログラムに焦点を当て，プログラム（第三期）終了 3 ヶ月後に参加保護者らにフォーカスグループインタビュー（以降，FGI とする）を実施することで，プログラム（第三期）の

* 熊本大学大学院特別支援教育専修
** くまもと芦北療育医療センター

有効性を調査し，その後のプログラムの修正点等を明らかとすることを目的とした．

2. 方　法

1）対象者

保護者プログラム（第三期）参加者4名（A, B, C, D）を調査対象とした．事前に電話で趣旨を説明し，FGIへの参加を依頼した．参加した保護者の子どもプログラム実施時の概要はTable 1，3ヶ月後の子どもの様子はTable 2の通りであった．

Table 1　プログラム実施時の子どもの概要

子ども	a	b	c	d
性別	女	男	男	男
年齢	2:8	3:2	5:4	5:6
遠城寺式発達指数	115.1	109.64	81.25	77.27
移動運動	84.37	105.26	81.25	84.85
手の運動	112.5	86.84	81.25	72.73
基本的習慣	137.5	86.84	81.25	54.55
対人関係	137.5	115.78	87.5	84.85
発語	125	126.31	75	84.85
言語理解	93.75	136.84	81.25	81.82

Table 2　3ヶ月後の子どもの様子

a	1月から母親と小4の姉の3人で幼稚園に徒歩通園中。デイサービスにも通い始めた。
b	4月から幼稚園に通う予定。プログラム終了後も、家でお返事や歌など、くまさんクラブごっこをして遊んでいる。
c	赤ちゃんが生まれたことが嬉しいようで、とても可愛がってくれている。幼稚園のことばの教室に通う予定である。
d	4月から小学校に通う。仲の良い友達が別の小学校に行くことを、母親は心配している。

2）保護者支援プログラム（第三期）の概要

保護者支援プログラム（第三期）の対象者募集は，P自治体K地区の保健福祉センター乳幼児健診担当者と，P自治体・発達支援センター療育支援担当者，K地区のM幼稚園の教諭を通して行われ，その結果3家庭から応募があった．また，去年参加し，このプログラムの継続参加を望んでいたAにも声をかけ，計4家庭で実施した．実際のプログラムはX-1年10月から11月まで実施され，その際，ボランティア養成プログラムを受講したボランティアによる子ども支援プログラムも並行して実施している．子ども支援プログラムは1回2時間，全8回であった．その中で，別室で

Table 3　保護者支援プログラム（第三期）の概要

	活動名・内容	目的
1	知り合いになりましょう プログラムの概要，他己紹介， ボランティアとの情報交換	お互いに知り合いになる 話の聴き方の提案 子どもの情報の提供
2	「お子さんが生まれてから についてお話しましょう」 話し合いとシェアリング	子どものことを話す経験 自分と子どもの関係を振り返る
3	「こんな時どうすればいいの」子どもに関わるより良いアイディアを話し合う，一週間の 過ごし方の作戦を立てる	お互いの関わり方について話し合う中で、問題解決を行う。メンバーを相談できる相手と意識できるようになる。
	「5〜7回のテーマを考えよう」	自分達でテーマを考えることで，参加者のニーズに沿った内容になる。
4	「私と子どもの 1 週間―こんな風に過ごしました」先週の話を基に1週間の生活を振り返る	子どもとの関わり方を振り返る。他者のアイディアに関心を持つ
5〜7	「自分達で決めたテーマに取り組みましょう」例：子どもとの関わりの中でこんな時が難しい，専門家の話を聞こう等。	グループで決めたテーマに取り組むことで，保護者は主体的に活動に参加する。お互いの知恵を出し合って活動することは参加者のエンパワメントに繋がる
8	「プログラム参加への振り返りをしましょう」	自分の経験や感じたことを話すことで，プログラム参加への意味を振り返る。
4・7	「お子さんの姿をのぞいてみましょう」時間の後半にボランティアとの関わりを見学し，子どもとの関わり方・遊び方などを話し合う。	子どもの姿を第三者に見る。 自分以外の人と子どもに関係を見る経験をする。

実施された保護者支援プログラムは実質1時間～1時間20分程度であった．全8回の概要はTable 3に示した．

3）手続き

(1) 期日：X年2月Y日

(2) 実施方法

P大学附属特別支援学校内施設で，調査対象者にFGIを実施した．保護者支援プログラム（第三期）の担当者である第二著者がファシリテーターを行った。

(3) インタビュー項目

リサーチクエスチョンは，「保護者と子どもの最近の様子とプログラム参加にはどのような関係があるか」，「保護者は現在どのようにプログラムを評価しているのか」，「プログラムの修正が必要な部分はどのような点か」 であった．

(4) 分析方法

本研究では，FGIによって収集された質的な情報を分析するためにグラウンデッド・セオリーを用いた．分析の流れは次のような手続きで行った．①リサーチクエスチョンの生成を行う．②逐語録を作成する．③リサーチクエスチョンを持ちながら逐語録全体を読む．④意味あると思われるデータの1行ごと，文章ごとにラベル付けコーディングする．⑤カテゴリーと他のカテゴリーを比較して，類似点や共通点のあるものをグループ化し，それをサブカテゴリーとする．⑥サブカテゴリー同士を比較して類似しているもの同士を更にグループ化する作業を繰り返す．そして，生成されたカテゴリー間の類似性と差異の発見を行き戻りしながら，絶えず比較分析を行う手法を用いた．

3. 結　果

第三期プログラム参加者4名にFGIを実施した．会話は4人で進められた．

また，FGIで収集したデータをKJ法の手法を用いて整理し図式化した（Fig.1）．

会話は，1. 親子の近況報告の場，2. 現在の所属先への不満，3. 新たな支援を受けるために行動している現状，4. 話し合いによる相互支援，5. 第三期親子支援プログラムの有用性，6. プログラムの改善点，7. 新しい支援コミュニティーの可能性の7種のカテゴリーに整理された．1のカテゴリーは子どもと保護者の現状に関する内容であり，2～3のカテゴリーは親子支援プログラムを受けてからの変化に関する内容，4のカテゴリーは話し合いによる気持ちの変化に関する内容，5については親子支援プログラムの良かった点，6についてはプログラムの改善の方向性を示している．7のカテゴリーは自主運営の可能性を示す内容であり，そこから8. エンパワメントの維持が導き出された．

1）親子の近況報告の場

発話は基本的に司会者から質問しているが，参加者全員が話をしている当事者の方を見て，相づち（「うんうん」「へぇ～」など）をしたり，笑顔の表情であった．表情や相づちからも保護者同士が相手の話に関心を抱きつつ，真剣に話を聞いている様子が伺えた．「親子の近況報告の場」というカテゴリーは，「くまさんクラブ後の様子」「就園・就学についての話」「出産後の大変さと喜び」の3つのサブカテゴリーに分類された．

(1) くまさんクラブ後の様子

「くまさんクラブ後の様子」というカテゴリーは，「くまさんクラブでは見られなかった新たな成長」「子どもがくまさんクラブを楽しみにしている様子」という2つのサブカテゴリーに整理できた．

①くまさんクラブでは見られなかった新たな成長

Aは子どもと一緒に幼稚園へ徒歩通園を始めたこと，またBは子どものおむつがとれたことに喜びを感じていることが伺えた．

②子どもがくまさんクラブを楽しみにしている様子

Bは，プログラム終了後も子どもがボランティアの写真を冷蔵庫に貼り，1人でお返事や歌を歌い，「くまさんクラブまだ？」と話していることを報告している．子どもがプログラムに楽しんで参加し，記憶を維持している事に参加者達は嬉しく感じている様子が観察された．

(2) 就園・就学についての話

「就園・就学についての話」というカテゴリーは，「就園・就学に向けての準備の忙しさ」「就園・就学に向けての不安」という2つのサブカテゴリーに整理できた．

①就園・就学に向けての準備の忙しさ

Dは小学校の見学に行き，就学の準備が大変だと感じている．またBも子どもが幼稚園の入園を控えており，その費用や準備に追われていることを報告した．

②就園・就学に向けての不安

Dは保育園の子どもの対応に不満を持っていた．

「D：小学校の先生は子どものことを分かってくれるかな…」 という発言から今後の就園・就学に不安を抱いていることが伺えた．また「仲のよかった友達と小学校が離れる事」や，「勉強についていけるか」といった不安も抱いていた．

Bも子どもが幼稚園に入園することから，「B：幼稚園にちゃんと行ってくれるか心配…行かないと言わな

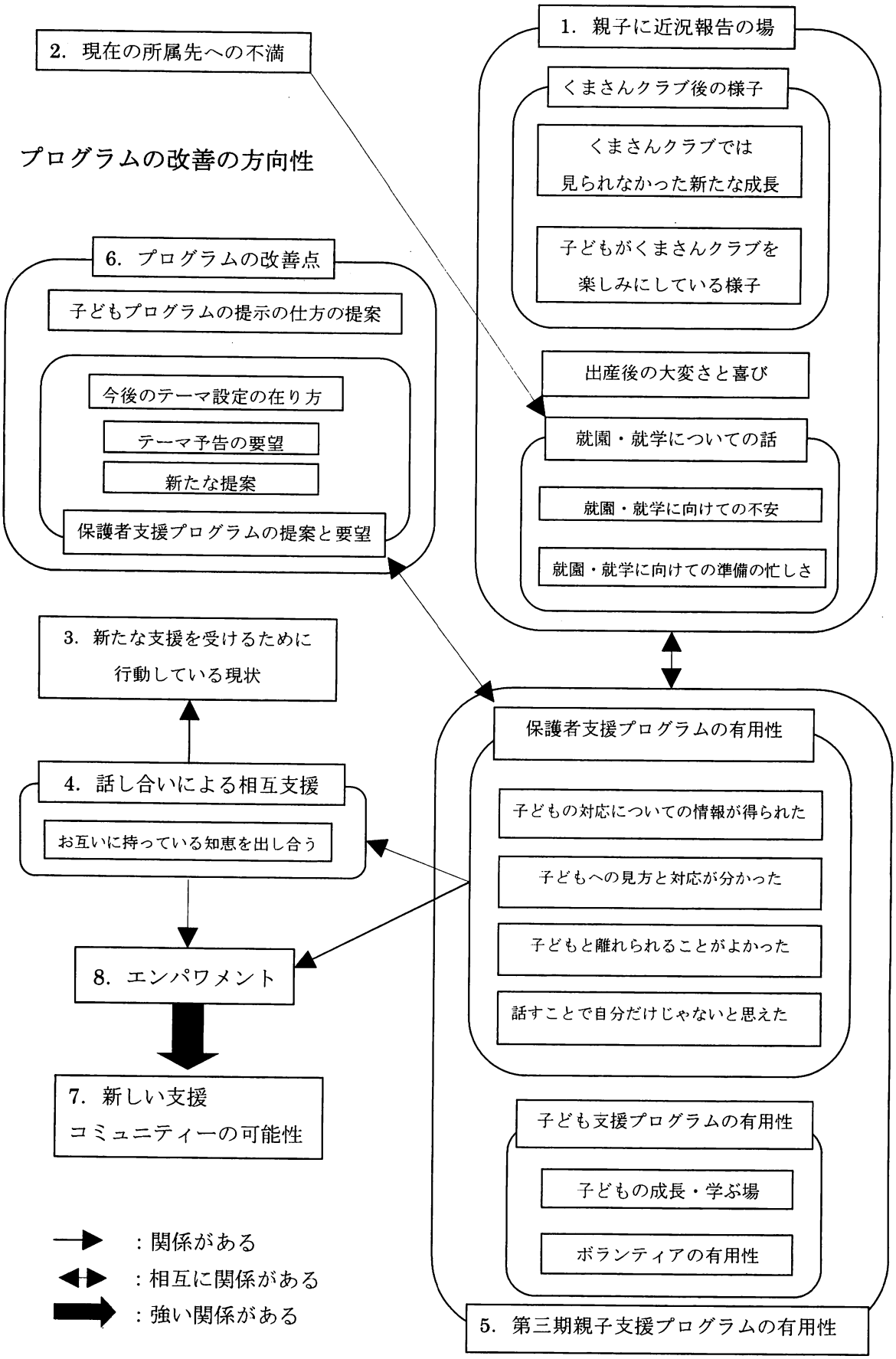

Fig.1 FGI の保護者の会話俯瞰図

*ければ良いな．子どもにとって楽しい場になれば良いけど…」*といった発言が見られた．

(3) 出産後の大変さと喜び

C は出産後の生活について話し，赤ちゃんが生まれてからの子ども達の反応を喜んでいる様子が観察された．

「C：赤ちゃんが生まれて大変ーけど，子ども達が可愛がってくれる．子どもがやきもち妬くかなーと思ってたら全然。みんなに自慢して言いふらしてた．」

2) 現在の所属先への不満

D は「保育園の先生は子どものことを分かってなかった」と感じており，保育園の対応に対して不満を抱いていた．

「D：保育園が「昔はあーだった，こーだったって．」もっと早く言ってよ．早く知りたかった」

3) 新たな支援を受けるために行動している現状

プログラム終了後，参加者は療育機関の見学に行っており，子どもの支援に向けて前向きに動いている様子が伺えた．

「C：幼稚園の言葉の教室に申し込んで，今は返事待ち．三気の家にも見学に行った．」「D：おひさまクラブに行き始めた．」

4) 話し合いによる相互支援

就園・就学に向けて不安を感じている参加者に，他の参加者が自分の経験から一緒に考え，アドバイスしている様子が観察された．

「C：歩かないんじゃ…行かないんじゃ．ハサミどうしよう．どんな風に伝えよう．」「D：支援クラスってどんな感じですか？A さんは今どんな感じですか？整理整頓も苦手だし，文字も書けない…」「A：うちもだよー．出来るようになる!!遅いけど．」

5) 第三期親子支援プログラムの有用性

「第三期親子支援プログラムの有用性」というカテゴリーは，「子ども支援プログラムの有用性」「保護者支援プログラムの有用性」という 2 つのサブカテゴリーに整理できた．

(1) 子ども支援プログラムの有用性

「子ども支援プログラムの有用性」というカテゴリーは，「子どもの成長・学ぶ場」「ボランティアの有用性」という 2 つのサブカテゴリーに整理できた．

①子どもの成長・学ぶ場

参加者はプログラムを振り返って，子どもの成長に喜びを感じている様子が伺えた．

「B：子どもの成長が見れた．家でくまさんクラブごっこや真似をしている姿を見ると，楽しかったんだなーって思った．子どもも学んだんだなぁ．」「C：子どもが親と離れても良いことがあると学べた．」

②ボランティアの有用性

*「D：くまさんクラブのボランティアが小学校でボランティアしてくれないかな．」*という発言から，ボランティアの子どもの関わり方に好感を持っていることが示唆された．

(2) 保護者支援プログラムの有用性

「保護者支援プログラムの有用性」というカテゴリーは，「子どもの対応についての情報が得られた」「子どもと離れられることが良かった」「話すことで自分だけじゃないと思えた」「子どもへの見方と対応が変わった」という 4 つのサブカテゴリーに分類された．

①子どもの対応についての情報が得られた

*「C：子どもへの対応の仕方が分かって，今は気になっていた行動を全くしない．」*という発言から，ここでの話し合いは，みんなで考えたり，情報交換を行ったりする良い機会になったと考えられる．

②子どもと離れられることが良かった

本プログラムは，子どもと親が離れそれぞれの活動が別室で行われた．「子どもと離れられて良かった」という話から，母親と子どもを少しの時間離し，親がゆっくりできる時間を作ることは，保護者のサポートにおいて有意義であったと分析する．

③話すことで自分だけじゃないと思えた

参加者達は自分の経験や思いを話し共感し合ったり，同じ話題を共有し，みんなで考えあったりしていた．

「D：同じ悩みをもつママ達と話すことで，自分だけじゃないと思ったり，気付かされること，学ぶことが多い．」

④子どもへの見方と対応が変わった

参加者達はプログラムを通して，自分を振り返り，考え方や見方に変化が生じていると考えられる発言があった．

「A：2 年間通わせてもらって自分の考え方に気付かされた．子どものこと，対応の仕方，学ぶことが多い．」「D：以前はできなくても良いやーって諦めてたけど，今は違う．できるようになる．時間はかかるけど…こうすればできるとか．怒るの減ったし．」「C：見方が変わったし，待てるようになった．」

6) プログラムの改善点

「プログラムの改善点」は「子どもプログラムの提示の仕方の提案」「保護者プログラムの提案と要望」の 2 つのサブカテゴリーに整理できた．

(1) 子どもプログラムの提示の仕方の提案

子どもプログラムでは，はじめの会で一日の流れを

説明する際，黒板に文字のカードを貼っていた．そこから，子どもには文字だけでなく，絵も一緒に提示してくれた方が分かりやすいという意見が得られた．

(2) 保護者プログラムの提案と要望

「保護者プログラムの提案と要望」というカテゴリーは，「テーマ設定の今後の在り方」「テーマ予告の要望」「新たな提案」という3つのサブカテゴリーに整理できた．

①テーマ設定の今後の在り方

参加者達は，毎回テーマに応じて話す機会が設けられ，5回目からは自分達で決めたテーマについて話すことになっている．*「プログラム前半はテーマ設定していないと話せない．自分達でテーマを決めるのは，2～3回目に言ってほしい」*という提案から，前半は予めテーマ設定をし，後半からは何を話したいか十分考えられるように，早めにテーマ設定について知らせた方が良いと分析する．

②テーマ予告の要望

*「話すことを考える時間がほしい」「毎回，「来週は〇〇についてです」という予告をしてほしい」「1回～8回用の見通しを持てるプリントが欲しい」*という提案があった．参加者がプログラムの時間内に自分の話したいことを話し，有意義に過ごせるよう，毎回次のテーマについて知らせることが良いと分析する．

③新たな提案

*「あれも聞けばよかった，これも聞けばよかったと後で出てくるので，悩んでいることや聞きたいことを書く欄を用意して欲しい．」「こんなことが知りたい，こんなことで悩んでいますなどの意見を書く欄を用意して，毎週提出すると考える時間がもてる．」*という意見が得られた．

7) 新しい支援コミュニティーの可能性

参加者達は連絡先を全員交換し，4人で集まることを計画していた．そこから，本プログラムは自分達で新たなコミュニティーを作るきっかけ作りに繋がり，プログラムの高い効果が得られたと分析する．

「C：ママ達4人で会う話が出てます．」「D：また誘ってください!!」

4. 考　察

今回得られたデータは，本プログラムの効果を説明し，解釈するのに有用であると思われる．これらの導き出されたデータを基にして保護者支援プログラム（第三期）の有用な点と改善点を探り，自主運営へ向けた方向性について考えていきたい．

1) 保護者支援プログラム（第三期）の有用な点

本研究のデータから導き出された保護者支援プログラムの有用な点は，「1. 子どもプログラム」「2. 同じような状況の保護者と話せること」，(3)「自分を振り返る機会」，(4)「話せる環境」の4つに整理できた．

(1)「子どもプログラム」

参加者は，並行して実施した子どもプログラムに対して，「子どもの成長が見れた」，「子どもが親と離れても良いことが分かった」，「ボランティアの関わりが良かった」と評価している．本プログラムは親子別々の活動であったことから，子どもは初めて親から離れ，家族以外の人と一緒に過ごした．その中で，出来なかったことが出来るようになったり，親が気づかなかった子どもの一面を知る機会にもなっていた．またボランティアと子どもの関わりを通して，親が普段の自分の子どもとの関わり方を振り返ったり，学ぶ機会にもなっていたと考えられる．このことから，子どもプログラムが親子に与えた影響は大きかったと考えられる．

(2) 同じような状況の保護者と話せたこと

Dの*「同じ悩みをもつママ達と話すことで，自分だけじゃないんだと思った．」*という発言からも分かるように，子どもの発達に気がかりをもっている親同士で，お互いの悩みや不安を理解し，共有することで，その不安を軽減したり解消したりしていたと考えられる．また，保護者同士で話すことで，新たな情報や関わり方のヒントを得ることにも繋がっていた．

(3) 自分を振り返る機会

*「以前はできなくても良いやーって諦めてたけど，今は違う．」「見方が変わったし，待てるようになった．」*という発言から，保護者は過去の自分の子どもへの関わり方を振り返り，プログラム後の自分の見方や考え方の変化を感じていた．よって，保護者同士で話すことは，保護者に自分自身を振り返る機会を与えたと考えられる．

(4) 話せる環境

母親達は普段の生活において，子どもと離れてゆっくり落ち着いて話す機会がないことが分かった．本プログラムでは，母親がボランティアに子どもを預け，別室で母親同士で過ごしていた．1時間という短い時間でも，母親は会話を通してストレスを発散し，レスパイトしていたと考えられる．

2) 保護者支援プログラム（第Ⅲ期）の改善点

福田（2010）によると，プログラム（第Ⅲ期）の効果として「保護者同士の話し合い」は，「1. 自分が求めていた仲間と出会う機会」，「2. 役立つ情報の獲得」，「3. 悩みの解決や不安の軽減」，「4. ストレス発散」，5.「自分を振り返る機会」，「6. 専門機関へ繋が

る可能性」,「7. 保護者のエンパワメント」の機会を与えることが分かった.

本研究では, 1～7全ての内容を確認できた. しかし, FGIの中で明らかになった改善点として,「テーマ設定と予告」が挙げられた.

(1) テーマ設定と予告

「自分達でテーマを決めるのは2～3回目に言ってほしい」という意見から, プログラム後半の自分達で決めたテーマで話をする際には, どのような話をしたいか十分に考える時間を取るため, プログラム前半に前もって保護者に説明し, 考えてきてもらう必要があると考えられる. また, 毎回プログラムの終了時に, 次回のテーマについて知らせることで, 一週間の間に話したいことを決めることができ, 有意義に時間を過ごすことに繋がると考えられる.

3) 地域での早期療育システム構築に向けて

肥後の研究グループは, CBRの考えに基づく「地域での早期療育システム」の構築を目指し, 非専門家という立場の人でもプログラムの実施を可能にするマニュアル開発を進め, 将来的には地域の中でプログラムを実施することを目標としている.

本研究の参加者は, 専門機関への抵抗を示し, 支援センター等は待機期間が長いため, その間にモチベーションが下がると感じていた（福田 2010). しかし, 本研究からも分かるように, 同じ悩みをもった保護者同士で話すことは, 子育てに役立つ情報を交換・獲得する機会を与え, 悩みや不安の軽減にも繋がっていた. また本プログラムを通して, 保護者には前向きに専門機関の支援を受けようという気持ちも生まれていた. このことから本プログラムは専門機関へ繋ぐ役割も果たしていたと考えられる. したがって, 今必要とされていることは, 非専門家にも解決できる問題に「早期に」「できる範囲で」支援していくプログラムを地域に広げていくことであると考えられる.

本プログラムをより地域に根ざしたものとして展開するためには, 保護者が中心となった自主運営が一つの方向性であると考えられる. そのため, 保護者がプログラムに参加することでその有効性に気づいてもらい, なおかつプログラムの維持と展開に関与できるよう, エンパワメントされることが必要となる. またエンパワメントされた保護者が再度プログラムに参加することの有効性も明らかになった（福田 2010). そのような保護者がプログラム運営に携わることは,「プログラムの自主運営」への可能性を高めると考えられる. 本研究の保護者は, 第三期プログラム終了後にエンパワメントされており, 3ヶ月後の本研究でもその維持が確認された. このことからプログラム終了後も定期的に保護者同士やボランティアが連絡を取り合い, 仲間関係の繋がりを維持していくことが保護者のエンパワメントの維持に繋がることが分かった.

本研究で我々が担った役割を, 母親や地域の非専門家が担うことができるように, 今後もプログラムの試行・検証を続けていくことが今後の課題である.

文献

1) 福田沙耶花（2010）発達に気がかりな子どもをもつ保護者への早期支援プログラム開発に関する研究―保護者支援プログラム（第三期）の実施と効果の検証―, 熊本大学特別支援教育特別専攻科 ―平成21年度卒業論文集―
2) 百田好香（2010）CBRに基づく就学前療育プログラム開発に関する研究―プログラム運営と子どもの集団活動プログラムを中心に―, 熊本大学教育学部養護学校教員養成課程 ―平成21年度卒業論文集―
3) 宮本美哉（2009）ハイリスク児をもつ保護者への早期支援プログラム開発に関する研究, 熊本大学大学院教育学研究科障害児教育専修 ―平成20年度修士論文集―
4) 半田 健（2009）CBRに基づく就学前療育プログラム開発に関する研究―子どもの個別活動プログラムを中心に―, 熊本大学教育学部養護学校教員養成課程 ―平成20年度卒業論文集―
5) 百田好香（2009）CBRに基づく就学前療育プログラム開発に関する研究―プログラム運営と子どもの集団活動プログラムを中心に―, 熊本大学教育学部養護学校教員養成課程 ―平成20年度卒業論文集―
6) 楢木野 薫（2008）障害のある子どもを持つ保護者のサポートプログラム開発に関する研究, 熊本大学大学院教育学研究科障害児教育専修 ―平成19年度修士論文集―
7) 筒井迪子（2008）就学前療育プログラム開発に関する試行的研究～子ども用プログラムの検討～, 臨床・社会学研究室研究収録 第5巻 第3号―平成19年度卒業・終了・修士論文集―
8) 肥後祥治（2003）地域に根差したリハビリテーション（CBR）からの日本の教育への示唆, 特殊教育学研究 41（3）345-355
9) 地域療育教室における発達障害児への早期支援に関する一考察, 愛知学院大学心身科学部紀要第2号増刊号（27-40), 2009
10) 大神英祐（2008）発達障害の早期支援―研究と実践を紡ぐ新しい地域連携―, 株式会社ミネルヴァ書房
11) E. ヘランダー（1996）著 中野善達 編訳, 偏見と尊厳―地域社会に根差したリハビリテーション入門―, 田研出版株式会社

12）木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い，弘文堂